

郷土の 偉人

「医は仁術」を実践した 北条郷の医師たち

江戸時代後期、ここ南陽の地に医師は何人ぐらいたのでしょうか。安政2年（1855年）の史料には15人の名前が記録されています。

その頃医師になるには、まず開業医の内弟子になり、次に米沢城下に出て藩医クラスに弟子入りし、修業を積んだら江戸に出てしかるべき医師に入門し、修業を経て帰国し開業する、という流れが一般的のようでした。

それでは、これら医師のうち、事跡のわかる方を紹介しましょう。

中山村の那須玄東は、小岩沢村と新田村の貧しい百姓数十人に薬を調合して与え、急病人には雨風・極寒・昼夜を問わず駆けつけたとして、弘化4年（1847年）、両村から藩に、玄東を表彰してくださいと願書が出されています。

鍋田村の戸田元清は、寒暑をいとわず駆け回って病人を治療し、重病や長患いなどで苦しんでいる者には金銭・米・みそ・衣類などを与えたとして、安政4年（1857年）に表彰されました。その息子の立信も、貧富・遠近の分けへだてなく諸村を駆け回って村人を治療し、また貧困で苦しむ者には父と同じく多くの手当てをしたとして、文久2年（1862年）、藩から賞^{しょうよ}誉されました。

医は仁術（医は、人命を救う博愛の道である）と言いますが、仁術を施していたのはこの3人だけが特別ではありません。米沢藩では、以前大流行した疫病の被害が大きかったため、安政2年（1855年）、全ての町・村で種痘^{しゅとう}（天然痘の予防接種）を実施しました。北条郷でも同年11月、宮内村3人、赤湯村2人の医師が種痘係に任命され、同月27日から翌年2月27日まで種痘を実施しました。寒さ厳しく雪深い中でしたが、村々を「1日も怠りなく精勤」し任

務を遂行しました。この医師たちはさらに、小松の医師たちが中津川・小国まで担当して大変だろうと手伝いを申し出ています。このようなことから、同年12月、北条郷50数か村は、心労をいとわず駆け回り、丁寧懇親を尽くしてくれた医師たちに対して御賞を下さるようと、藩にお願いしています。

北条郷の医師たちは、「医は仁術」を文字通り実践していたのです。

文・須崎寛二

平成25年3月1日号 市報なんよう掲載

●安政2年からの種痘施行のことが書き留めてある諸事記録（もと宮内、船山道也さん所蔵）

